

# ペルー共和国、ワラルの「テンプラ」と桜

芸術性豊かで平和なチャンカイ文化を花開かせたチャンカイ谷。この一帯を緑の耕地に変え、綿花を栽培し、鶏を飼い、野菜・柑橘類の一大生産地とした日系移民たちだが、一世と二世以降としては文化的なアイデンティティにさまざまな違いが生まれつつある。

ペルーの首都リマから北へ約七〇キロメートル、チャンカイ谷の中心に日系人口の割合が高い都市、ワラル市がある。私は考古学調査のため同地に滞在し、その間、日系一世のカナおばあちゃん（仮名）が娘さんと二人で暮らす家に居候していた。



編み物をしながらペルー人女性が「テンプラ」を売っている

しむのである。  
**夫婦で沖繩からペルーに**  
なぜこの町がこれほど日本と縁があるのか。ワラルの歴史をひも解くと町の発展に日本人移民が大きく関わっている。ペルーへの日本人移民は一八九九年から始まり、現在では約九万人の日系人が在住する。移民初期は大農場での契約移民として受け入れられたものの、居住・労働環境は苛酷で死者や逃亡者が続出した。チャンカイ谷も同様だったが、荒廃した土地を開墾してサトウキビや綿花を栽培し、大農場主にまで登り詰めた一人の日本人男性がいた。彼の尽力でチャンカイ谷は農業的・社会的発展を遂げ、多くの日本人移民が彼の農場で働いた。これが、ワラルに日系人が多い所以である。



前である。そのころ、彼女の出身地である沖繩には仕事が無かった。すでにペルーで働いていた夫の兄弟の呼び寄せもあり、二人は希望を胸に子どもを連れてペルーに渡った。  
夫婦で手がけた商売は軌道に乗り、九人の子どもにも恵まれた。しかし戦争によってすべてを失い、日本への帰国もままならず、ペルーで懸命に働くほかなかった。

言葉の端々にペルーを愛する一方で日本への憧憬が見え隠れする。日系人は常に自分の居場所を探しながらそれぞれの生きる道を選択しているのではないだろうか。それは、本来の姿を変容させて現地社会に適応し受け入れられてきた「テンプラ」に象徴されるだろう。

カナおばあちゃんがペルーに渡ったのは一九三六年、第二次世界大戦

## お善の母とフォークの娘

カナおばあちゃんの娘のユミコさん（仮名）のつくる食事はペルー料理が主菜で、日本料理が副菜である。カナおばあちゃんと私には日本式にお茶碗とお椀で、おかずは小分けにして出してくれる。おばあちゃんは箸を使い、「いただきます」「ごちそうさま」と挨拶をしながら手を合わせる。

その隣で、ユミコさんはペルー式にご飯もおかずもすべて一皿に乗せ、フォークでいただく。そのコントラ

ストが妙であり、それぞれの人生を象徴しているように見えた。

この違いは使用言語にもみられる。おばあちゃんは私に対して日本語で話しかける一方で、ユミコさんとの会話には日本語とスペイン語（ペルーの公用語）が混在する。

この背景には、多くの日系二世が現地の小・中学校に通い、とくに日本文化に関する教育を受けていないことがあるようだ。幼いころから家の中では親同士の会話は日本語、子どもたちと親との会話はスペイン語だった。親は仕事に専念しなければ



カナおばあちゃんとユミコさん

ならなかったから、親子の意思の疎通が困難なことも多かったという。

## 海を漂う日系人二世たち

日系一世が高齢となったいま、もはや移民当時や日本文化に精通する日系人は少ない。先に述べたように、一世と二世以降の文化的差異の溝は深い。二世では、まだ仏壇に位牌を置きお線香を供える家はあるものの、三世になるとはやカトリック教徒のペルー人として生活している。

日系二世は口をそろえて、「私たちは日本人の顔をしているけれど、半分ペルー人なんだ。日本に行けば外国人として扱われ、ペルーでは日本人として見られる。いつも海を漂っているみたい」と語る。  
彼らの根底には二カ国を行き来するアイデンティティの揺れがあり、

## 少女のように 沖繩民謡を歌う

一方、桜を愛でるという習慣を日系人が大切に守ることは、彼らの心の拠り所として日本が強く意識されているからだと思う。とりわけ日系一世には特別な思い入れがみられる。しかし、その魂を何世代まで継承できるのかが気がかりだ。

カナおばあちゃんは一〇〇歳を過ぎて認知症が進んだが、沖繩舞踊のビデオを見ると自然と笑顔になり、手拍子までしていた。時折、ふと思いついたように沖繩の古い民謡を歌いはじめることもあった。しだいに曖昧になる記憶のなかでも、幼いころの日本の文化や習慣は、心に深く刻まれていた。

今年五月初め、心待ちにしていた桜が咲く前におばあちゃんは逝去された。一〇二歳の誕生日まであと一〇日だった。少女のように沖繩民謡を歌うおばあちゃんの表情が脳裏に焼き付いている。



1世から4世までそろったお花見



ペルー料理とのりまき